

「雪国の森林づくり」の出版とその頃の思い出

小谷 二郎（石川県農林総合研究センター林業試験場）

I 豪雪協との出会い

私をはじめ豪雪協に参加したのは、ちょうど石川県に入庁したばかりの1987年（昭和62年）、鳥取での開催の年でした。そのころには協議会の会員も15県でしかも場所長が一緒でしたので大変賑やかでした。2泊3日で開催され、ゆったりと温泉に浸かり、移動のバスの中ではガイドさんの名所旧跡案内や民謡など美しい歌声も披露され、はじめて参加した私には大変楽しい研修旅行でした。

しかしながら、私が加わった鳥取の大会以降数年は、協議会の活動方針を議論する場面が多かった時期でもありました。その頃には、国の補助金による研究課題「地域重要課題」という枠があり、豪雪協はいつもその座布団を確保していました。そのため、新規課題を立ち上げる際には開催担当県の場所長は、林野庁へ陳情に行くという役割がありました。メンバーの中にはこうした活動を疑問視する声もあり、総会では延々と話し合いが続き日程を変更して議論する年が続きました。当時、若かった私は豪雪協の活動方針よりも研究成果発表会や現地検討会のことしか頭に無く、総会でのこうした議論は楽しい研修旅行との落差があまりにも大きすぎ、違和感を覚えたものでした。

II 原点に戻る

その期間にいろいろと議論された結果、協議会の活動内容がいくつか改められました。これまで、毎年開催されていた場所長の集まりは4年に1度（今は、重要事項が発生したときのみ）となり、技術交流会を中心に行おうということになりました。元々、豪雪協は雪国での人工林の育成、とりわけ雪起こしの技術を進めるため、積雪環境の異なる東北と北陸の5県で交流会を始めたのがきっかけでしたので、言わば原点に戻ろうということになった訳です。当時の中心メンバーであった、山形県の佐藤さん、新潟県の野表さん、富山県の平さん、福井県の松田さんといった創設時またはそれに近い時期から活動されてきた方々は、豪雪協の行く末を非常に案じていらっしやっただけに、本来の姿に戻ることが決まった時にはホッとされたようでした。今考えると、当時私を含め、鳥取県の前田さん、新潟県の箕口さん、岐阜県の横井さんなど若いメンバーが加わり始めたことで先輩方は我々が活動しやすいように方向を修正して下さったのではないかと感じています。こうした転換期は平成3年頃まで続いたように記憶しています。しかし、不思議なことに、その後の「地域重要課題」でも豪雪協が取り組みやすい研究課題が続き、それに乗りながら研究ができていたのは大変ラッキーであったと思います。ただ、そんなこととは無関係に、活動の方向性を確認しあった結果、技術交流会や現地検討会は現在の様に熱心な議論が展開され、毎年参加するのが大変楽しみでした。それを支えたのは、参加メンバーが良かったのはもちろんですが、もう1つ当時取り組んでいた研究課題も良かったからだと思っています。

Ⅲ 拡大造林と不成績造林

私が豪雪協に参加した時には、すでに先輩方が「雪に強い森林の育て方」という成果本を出版されていました。拡大造林がはじまった当時、太平洋側の技術をそのまま適応していた雪国にとって、この本の内容は画期的な技術開発の集大成であったと思います。植栽密度を従来よりも低くしても高い成林が見込まれること。造林地の選択は、地位だけでなく最深積雪深が重要なこと。雪起こしは、根元曲りの抑制と同時に樹高成長を促進すること。冠雪害回避のためには形状比を70以下に抑え、そのための密度として収量比数を0.7以下で管理すること。といった、今では当然のことがその当時の豪雪協の技術交流で開発提唱されたのです。この本は、これまでの豪雪協の試験内容をまとめたものですが、これ以外にも機関誌「雪と造林」や各県の研究報告や業務報告を読む限り、新人の私にはこれ以上研究する内容はもう無いのではないかと感じたほどでした。

ところが、その当時の「地域重要課題」は「積雪地帯における広葉樹林の造成・改良」（昭和61～63年）という、これまでの人工林の育成を中心とした課題とは一味異なり、造林地に侵入した広葉樹や周辺の広葉樹林の育成を取り扱った内容でした。この研究課題を設計したのは、当時森林総研の更新機構研究室の室長だった谷本丈夫さん（元宇都宮大学教授）でした。谷本さんは、前任の室長の前田禎三さん（鳥取県の前田さんのお父さんで、元宇都宮大学教授）とともに新潟県の豪雪地で不成績なスギ人工林内で更新したブナを調査され、豪雪地帯ではスギよりも広葉樹の育成を考えた方が得策だという結果を森林総研の研究報告（前田ら1985）に書かれていました。おそらく、積雪環境による「不成績造林」という用語が使われたのは前田さんや谷本さんが最初だと思います。私は、これにあやかって第99～101会の林学会で「多雪地帯でのスギ不成績造林地の改良」（小谷1988；小谷・矢田1989；小谷1990）といタイトルで発表しましたが、今考えればやや大胆だったかもしれません。ともあれ、我々第2世代がメンバーに加わった頃は拡大造林も終焉を迎え、私の学生時代の卒論と修論がブナやミズナラに関する事だったせいもあって、県に入った時は、まさに飛びつくように研究に取り組みせていただきました。これも、ひとえに谷本さんと不成績造林地のおかげだったかもしれません。不成績造林の研究では、横井さんと長谷川さんが画期的な成果を上げられ、ドクターを取得されました。

Ⅳ 不成績造林地問題、誰がまとめるの？

こうして、豪雪協のメンバーはその後の後継課題も含め約10年間、国の補助金をいただきながら不成績造林地の調査をしました。その頃、森林総研や大学など多くの方々が高冷地や豪雪地のブナやミズナラをはじめとする天然林や二次林の研究をされていました。おそらく、1980年代半ばから1990年代の造林関係の主流となった研究テーマは広葉樹に関係したものだったと思います。その意味で、当時、我々は豪雪地帯での森林造成では割りと先端を行き、林学会でも豪雪協の存在意義を大きくアピールできたのではないかと考えています。ただ、その当時、我々メンバーそれぞれが研究発表や論文で成果を示すことは出来ていても、豪雪協としてのまとまった成果を示してはいませんでした。豪雪地帯での針葉樹人工林の有り方を俯瞰し、不成績造林地をどのように導くかという方向性を見出す

ことが、我々の使命だったのではないのでしょうか。「不成績造林地問題、誰がまとめるの？」と言われてたら、やはり問題を投げかけた豪雪協がまとめるのが当然、ということだったと思います。

私は、1993～94年（平成5～6年）の2年間事務所へ転勤となり、成果本を出すきっかけとなった話については詳しくは判りませんが、いろいろな人から、「どうして豪雪協で不成績造林地問題をまとめないのか」と言われたようで、私が豪雪協へ戻ってきた時はすでに成果本を出す方向性は決まっていました。ただ、その時はまだ内容やタイトルすら決まっていませんでした。

V タイトル「雪国の森林づくり」

私の記憶では、1995年（平成7年）の山形での開催時に執筆の担当者を決め、作業を開始したように思います。なんとタイミングがいいことか、その時の山形県の場長は、豪雪協発足者の1人である佐藤啓祐さんでした。しかも、佐藤さんはその年で退職になられるということで、一層力が入った記憶があります。しかし、実際に出版に至ったのはそれから5年後の2000年（平成12年）12月でした。その間、何度か担当者に集まって頂き編集委員会を開きました。最初に、各県からデータを出していただき、その中から担当者が取捨選択して原稿を書き上げました。担当者は、山形県の小野瀬さん、新潟県の箕口さん（現在、新潟大学教授）、富山県の長谷川さん、岐阜県の横井さん（現在、岐阜県立森林文化アカデミー教授）、鳥取県の前田さん、それに私の6人でした。お互いの距離が遠いこともあって、皆が集まりやすい場所をと想定して東京で集まりました。石川県の東京事務所や林野庁の会議室のほか、鳥取県の前田さんの東京のご自宅でもお世話になりました。

かなり議論を重ね、それなりに煮詰まったものが出来上がったのですが、なにせ我々としては初めての経験だったので、これがどの程度の出来栄なのかまったくわからない状態でした。そこで、専門家のアドバイスが必要と感じ、当時、森林総研の育林技術科長をされていた小野寺弘道さん（元山形大学教授）にアドバイスを頂くことにしました。小野寺さんは、「雪と森林」（小野寺1990）という普及冊子を出され、積雪環境下での森林造成に関しての第一人者でした。小野寺さんには、不成績造林を詳しく解説している点を高く評価していただいたのですが、タイトルや各章の見出しに「不成績」の文字がやたらに多過ぎ、イメージが暗いのもっと前向きなものに変えたらどうかというご意見もいただきました。これは、大変ありがたいご指摘でした。そこで、各章の見出しや文言を見直し、そして最終的にこの本のタイトルを「雪国の森林（もり）づくり—スギ造林の現状と広葉樹の活用」とすることにしました。本を出版するという事は、相当な準備や構想が必要で、本当に難しいとこの時感じました。なお、小野寺さんにはこの本の「推薦の言葉」を書いていただきました。この場をお借りして、あらためてお礼を申し上げるしだいです。

VI 豪雪協で学んだこと

各県の担当者は、所属の場所長に毎年のように「豪雪協って何？」と聞かれ、事細かく説明を余儀なくされていることでしょう。このようにブロックを跨いで集まる協議会などほとんど存在していない現状から、豪雪協の存在が信じられないのは当然だと思います。しかし、これまで発刊した3冊の成

果本と機関誌「雪と造林」を見せれば、それなりに理解していただけるはずですが、それは、先輩方をはじめ我々自身が積み上げてきた実績に他ならないからです。是非、そこへ参加する意味を熱意を込めて説明してください。そして、参加するからには、何かをアピールし何かを持ち帰ってください。豪雪協は、学会と違って、時間をかけて忌憚のない意見を出し合う場です。そして、現場を重視する場です。先輩諸氏からいつも言われていたのは、「一部で行った試験がすべてに当てはまるはずがないので、失敗した事例でも何でもいいから必ず現場をよくみなさい」ということでした。自分の試験が本当に正しいのか、何が足りないのか、自分のなすべきことを現場から探し出してください。

私が豪雪協から学んだことはもう1つ、自分の得意な分野（樹種でも作業種でも構いません）を持つことが大切だということです。それは、自分自身にとって大きな自信となるからです。当時のメンバーは、それぞれ独自の視点で取り組んでいました。よくよく考えてみると、このことが豪雪協にとって全体の底上げになり、結局のところレベルアップに繋がっていたと思います。是非、誰も取り組んでいない得意な分野を作ってください。そのためには、なんとといっても自分の試験地を大切にすることだと思います。「現場100回」ではないですが、何回も試験地に通り、そこから得られる情報を最大限生かし、試行錯誤を繰り返して独自の技術を創造してください。そして、それを豪雪協や学会等で披露し、多くの意見をもらって、さらにレベルアップして行ってください。こうした行動は、自分自身のためにもなりますが、なんとといっても皆さんの県にとって大きな財産になっているということを忘れないでください。少なからず、豪雪協はそのことに役立っていると自負しています。

Ⅶ おわりに

「雪国の森林づくり」の出版は、私にとって大変いい経験になりました。諸先輩方や当時のメンバーに心よりお礼を申し上げます。私自身、石川県に入り30年近くが経ちました。豪雪協に長い間参加させていただき、いろいろな場面で好き勝手なことを言ってご迷惑をおかけしたのではないかと少し反省もしています。これからも、豪雪協が続いてくれることを切に願っております。

引用文献

- 小谷二郎（1988）多雪地帯における不成績造林地の改良に関する研究（Ⅰ）—スギ造林地内で再生した広葉樹の成長パターンについて—。日林論 99：297-298
- 小谷二郎・矢田 豊（1989）多雪地帯における不成績造林地の改良に関する研究（Ⅱ）—放置されたスギ造林地の林分構造および広葉樹の生育状況—。日林論 100：257-258
- 小谷二郎（1988）多雪地帯における不成績造林地の改良に関する研究（Ⅲ）—侵入広葉樹の優占性について—。日林論 101：469-470
- 前田禎三・宮川 清・谷本丈夫（1985）：新潟県五味沢におけるブナ林の植生と跡地更新—スギ造林地の成績とブナの天然更新の提案—。林試研報 333：123-171
- 小野寺弘道（1990）：雪と森林。わかりやすい林業研究解説シリーズ 96、81pp、林業科学技術振興所、東京